

御家流香道要略集 全

御家流香道要略集 全

伊與田勝由傳 細谷松男写 一冊 写本
東北大学附属図書館 狩野文庫蔵

【凡例】

- ① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
- ② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
- ③ 黒字の（ ）は、本文内に小文字で記された注記です。
- ④ 青字の（ ）は、筆者の補足です。
- ⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

香道要略集目錄

- 一 香會前後一會始終の事
- 一 敷紙乱箱組付三段の式の事
- 一 小記録の事
- 一 敷紙の事
- 一 香拵之大きさ寸法の事
- 一 灰押し様の事
- 一 記録認め様の事
- 一 貴人御座設之の事
- 一 前後香棚飾り付け組み付けの事
- 一 香席上座の事
- 一 香席詞遣いの事

東京大学文学部図書印
 東京大学文学部図書
 蔵書印
 昭和二十二年四月



香道要略集目錄

- 一 香會前後一會始終の式の事
- 一 敷紙乱箱組付三段の式の事
- 一 小記録の事
- 一 敷紙の事
- 一 香拵之大きさ寸法の事
- 一 灰押し様の事
- 一 記録認め様の事
- 一 貴人御座設之の事
- 一 前後香棚飾り付け組み付けの事
- 一 香席上座の事
- 一 香席詞遣いの事

- 一 香席法度之事
- 一 百炷香一会始終之事
- 一 組香檮古口授傳之事
- 一 拾八組組香小引之事

以上

御家流香令之式

兼て廻文を以て連衆を催す。當日に至り、客未だ来ぬうち
先座敷を掃除し、床に掛物にても掛花にても生け、床
脇の畳に香棚を飾り置くなり。上に十炷香箱を袋に入
て移し、右の袋の緒の結び様、時節の結び方を用ゆ。中
の棚、右の方に乱箱に香拵の道具を飾り付けて横に置くなり。
乱箱の内、組み付けは敷紙の内に香刻盤とかり(仮)包と二品
を入れて、乱箱の左の方に縦に置く。箱の真中に当日用
ひん組香の惣包を置き、右の方向こうに香盆を置き、手前の方
に染墨入を置くなり。この組み付けも別に図あり。
中棚、左の方に香炉一対かき上げ灰して、ならべ置くなり。地板の上
に料紙、硯、記録紙を置く。着座順を定め候。圖(くじ)様置く時は料

- 一 香席法度の事
- 一 百炷香一会始終の事
- 一 組香檮古口授傳の事
- 一 拾八組組香小引の事

以上

御家流香会之式

兼て廻文を以て連衆を催すべし。当日に至り、客未だ来ぬうち
まず座敷を掃除し、床に掛物にても掛花にても生け、床
脇の畳に香棚を飾り置くなり。上に十炷香箱を袋に入
て横に置なり。袋の緒の結び様、時節の結び方を用ゆ。中
の棚、右の方に乱箱に香拵の道具を飾り付けて横に置くなり。
乱箱の内、組み付けは敷紙の内に香刻盤とかり(仮)包と二品
を入れて、乱箱の左の方に縦に置く。箱の真中に当日用
ひん組香の惣包を置き、右の方向こうに香盆を置き、手前の方
に染墨入を置くなり。この組み付けも別に図あり。
中棚、左の方に香炉一対かき上げ灰して、ならべ置くなり。地板の上
に料紙、硯、記録紙を置く。着座順を定め候。圖(くじ)様置く時は料

紙の脇に置く如し。客の来たるを待つなり。客来たり座敷に入り、床の内、香棚、飾り付け等を見て着座の時、亭主、勝手より香刀、香鋸、香筋、香巾を道具包に入れ懐中し出て、主客相応の挨拶済みて香拵えに掛る。兼ねて「何香たて候」と約束なれば、直に「御香拵え致すべし」と挨拶す。また、何香とも約束無き時は「今日は何れの香、御聞候え」と上客へ聞合せ申候。客よりは「十炷香然るべき由」挨拶致すべし。初めより盤物等望む事致さざる事なり。もし、客より外の香望み候へば、十柱香箱より其香の惣包を出し、乱箱の内の包と取り替えるなり。さて、香棚に向かい乱箱を少し前へ引き出し、両手にて静に取りおろし、香元座の左の方に置き、また、地板の上の硯箱を取り、右の方に置き、記録紙をその脇に置く。それより乱箱の内の敷紙を取り出し、開き、敷きて香割

盤を真中に置き、かり包を左の向こうにならば、香盆をとり、向こう右の方に置き、染墨入を香盆の前に置き、十柱香惣包出す。乱箱を少し後へ引くなり。それより懐中の道具包を取出し、開きて香巾を取り捌きて、左の手にうつつし、右にて香刀を取りふ(拭)き、敷紙右の方、染墨入の前に香刀、香鋸、香筋をふきならべ、道具包は置みて硯の前に置く。それより鋪(敷)紙の上の香盆を取りて上客の前へ出し、出香を乞う。この時、上客より順々に香を出し、香盆にのせて未座より亭主へ渡す。香元請け取り、元の所へ直し置き、盆の上の出香を「一、二、三、ウ」と一の香より香拵えをするなり。この時、執筆の人、または未座の人、手伝いを致すべし。一の香より順々に香をかり包へ入れ、「一、二、三、ウ」の香名並び香主の名乗を書き付ける。一松風 名乗か様に書きて元の処に置く。執筆、小記録紙

と格一二三の香名帯との名書記して表紙の向へ置く。出香
と香盆を載せ上客へ返す。連中、出香を納めて、香盆を上客より
亭主へ返す。下座より返す。時宜に寄るべし。請け取りて元の座
に置き、さて、惣包を開き、香包残らず取り出し、惣包は乱箱へ入れ
「一、二、三、ウ」の包を能々(よくよく)改め、本香包三包宛重ね、試包も添え
て香割盤の向こうにならば染墨入を取り、蓋を開き、「一」のかり包
の香を染墨にて染め、本香包にうつし、「二、三、ウ」も順々に染め
うつし、また、本(もと)のごとく香割盤の向こうへならべ、乱箱の惣包を
取り出し、本香包を入れて、直に乱箱へ入る。香盆、染墨入も
乱箱へ納め、道具包を開き、香筋、香鋸、香刀を香巾にてふき
道具包に入れ、香元右の方に置く。この三品、香巾にてふかず。そのまま
仕舞いてもよろし。時宜に寄るべし。香割盤とかり包は、その

まま敷紙にて置いて畳み、乱箱へ入る。さて、記録は香元の脇にて
執筆、認めるなり。客へ座順を窺い、或いは籤筒(抽選)様にて極る事も
時宜によるべし。座順定まりて札紋のならばに名乗を書き、小
記録に認め置きたる香組を本記録に書き写し、小記録ともに
乱箱の内へ入れるなり。さて、乱箱を両手にて持ち、元の如く棚へ揚げる。
硯箱も本の地板の上、料紙の上へ直し置き、香巾、道具包は
懐中し、少し退きて、「会席料理出すべき旨」挨拶して勝手入り、会席
を出す。さて、右、会席口伝多し。菓子出す事もあり。挨拶済みて
客、中立致す。亭主、座敷飾り改め、棚飾も仕かへるなり。この一会
稽舌無くては述べがたし。

中立後飾

中立後飾

中立後の飾り十炉香箱袋と取て香棚の袋の上より壁
に置き、乱箱は上の棚に置く。箱の組み付けは別に図あり。記録紙は
地板、硯箱の上に置くなり。初め花あらば、掛物と仕かえ、座中を掃
き、香炉に下火を入れ、能々心を付け、案内しても宜しと思はば
客に「御通り候へ」と案内し、勝手へ入るなり。客、手水相済ませ座敷に
入り、上客より順々に飾り付け等を見て、連中着座す。その時、亭
主、勝手より敷紙の内へ香中を入れ、左の手に持ち出、香元座の
前に置く。「御香始め候はん」と挨拶して、棚に向かい、上の乱箱を両
手にて「そと」「そと」引き出し持ちて、香元座の左へなおし置き、記録紙、
硯箱も取り出し、右の方に置く。さて、敷紙を敷きて、乱箱の内の道具
を飾り付けるなり。まず、香盆にのせて有る札箱を盆共に取り、敷紙の
左の方、向こうに置く。銀葉盤を取り敷紙の真中少し向こうの方に

置く。試盤をその前に置き、銀葉入、火未入と敷紙の右の向こうに
ならべ、折居を取り「一」より「十」迄、字の順を見て、銀葉入、大未入置きたる
前に重ね置く。札筒を取り札を入るる口を豎に、敷紙の右の下ば
しに置き、香筋瓶をとり、敷紙の右の方畳の上に置く。一の炉、右
の手にて取り、敷紙香炉本座に置く。また、二の炉を取り、敷紙
左の方、香盆の前に置く。惣包を取り開き、試包を本香盤の肩
の方に置き、本香包は二の炉の前にならべ置く。乱箱を少し後へ引くなり。
さて、ふくさを取り捌き、左の手へ移し、右の手にて火筋瓶の火
筋を取り、ふき、灰押、羽箒と順々にふき、敷紙の上、折居置
たる下、札筒の脇にならべ置くなり。この時、執筆の人、勝手より火
取香炉へ火を入れ持ち出る。亭主、請け取り、一の炉、二の炉ともに下
火を入れ替える。一の炉、灰を押して、火加減の事、上客へ窺い香

爐取出す。上客、香爐を請け取り、二客へ相談して香爐を香元へ戻し、「御火加減宜しかるべし」と挨拶す。亭主請け取り、眞の灰箸目を付け羽箒にて香爐を掃く時、上客「御灰箸目拝見致したく」と所望す。その時、香爐を出し、上客へ渡す。連中、段々見る内、二の炉を取り、灰押し箸目を付ける。二の炉は、灰を少し麿末(そまつ)にする。客よりも所望はせず、そのまま元の所へ置く。この時、上客より下座にても戻す。香爐を香元へ戻す。「御箸目宜しく出来候」と挨拶す。さて、香巾を取り捌き、火筋を火筋瓶にさし、その次、手に銀狭みを取り、香巾にてふき、火筋置きたる跡へ置き、灰押を取り火筋瓶の香すくい(掬)と取り替え、ふきて灰押の跡へ置き、羽箒を取り火筋瓶の香筋と取り替え、ふきて羽箒の跡へ置き、また、こじ(火筋)立の鶯を取り

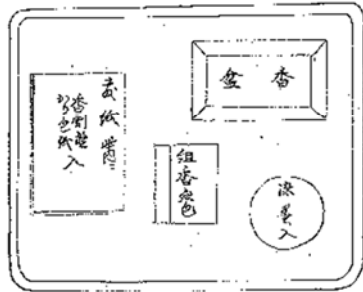
ふきて香筋とならべ置く。さて、銀葉入を取りふき、蓋を開き、銀狹にて銀葉を本香盤と試盤の上に置きならべ、銀葉入の蓋をして本の座に置く。さて、香盤の札を盆ともに上客の前に出す。上客、請け取り、記録と見合わせ、「また、執筆、記録紋読みてもよし。」札を小札ともに取り、香盆は

末座より香元へ返るを請け取りて、直に乱箱へ入れる。それより香爐を取りあげて火加減を試み、下に置く。銀狹にて銀葉を取り、灰の上に置く。また、一ぺん火加減を試み、下に置き「御香始める」由挨拶する時に連中残らず頓首す。さて、試の包を取り開き、香筋にて香を銀葉の上に置き、香爐取りあげ、「そと」伺いて上客へ出す。「これは一」「これは二」とことわり出す。連中聞き終りて、香爐、香元へ返らば、また、焚き出す事始めの如し。試み終りて、試盤を向こうの方へ直し、本香盤、前の方へ置き替るなり。試包も本の所に置き、鶯を立てる。さて、本香立

焼くなり。香炉、上客へ渡し、後の包紙を鶯にさす。上客聞きて、
 二客へ香炉渡したる時に札筒を取り、札入るる口を横にして
 上客の前へ出す。一の炉、六、七客取りあげ聞き候時分、二の炉を取り
 火加減を試みて焚き出す。一の炉、香元へ戻らば、銀葉を銀葉盤へ
 戻し、次の銀葉を狭み、香炉に置き、焚き出す事始めの如し。さて、折
 居を取り、香元の前に置く。札筒の返るを待ち、札筒、香元に返らば
 札を折居にうつし、敷紙右の方、畳の上に「一」より「五」まで、「六」より
 「十」まで、二行に段々にならべ置く。焚き終りて、香炉、香元へ返らば
 そのまま本座に置き、札を「十」の折居にうつし、「御香みて候」と挨拶す。
 主客皆頓首す。さて、乱箱の香盆を取り出し、上客へ渡し、
 余り札を取り集む。盆、香元へ返らば、直に乱箱へ入るる。

候間「御安座成らるべく」と挨拶す。客皆頓首す。これより香救(匙)にて
 焚くなり。香炉、上客へ渡し、後の包紙を鶯にさす。上客聞きて、
 二客へ香炉渡したる時に札筒を取り、札入るる口を横にして
 上客の前へ出す。一の炉、六、七客取りあげ聞き候時分、二の炉を取り
 火加減を試みて焚き出す。一の炉、香元へ戻らば、銀葉を銀葉盤へ
 戻し、次の銀葉を狭み、香炉に置き、焚き出す事始めの如し。さて、折
 居を取り、香元の前に置く。札筒の返るを待ち、札筒、香元に返らば
 札を折居にうつし、敷紙右の方、畳の上に「一」より「五」まで、「六」より
 「十」まで、二行に段々にならべ置く。焚き終りて、香炉、香元へ返らば
 そのまま本座に置き、札を「十」の折居にうつし、「御香みて候」と挨拶す。
 主客皆頓首す。さて、乱箱の香盆を取り出し、上客へ渡し、
 余り札を取り集む。盆、香元へ返らば、直に乱箱へ入るる。

十種香乱箱の飾り、並び敷紙の上、組み付け次第
 初座、香拵の時、乱箱組み付けの圖
 菊小園抄末に記之



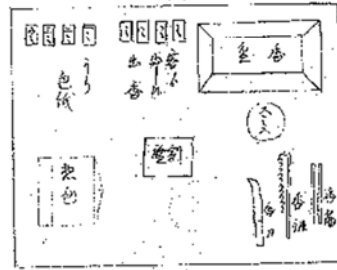
初座飾
 此の如く組拵を
 香拵の中棚の
 右の方に置くなり

[図]

十種香乱箱の飾り、並び敷紙の上、組み付け次第
 初座、香拵の時、乱箱組み付けの図
 このほか図この末に記すなり。

初座飾り
 この如く組み付けて
 香拵の中棚の
 右の方に置くなり。

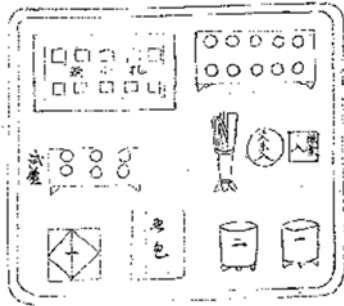
初座、香拵く時、敷紙の上、組付図



初座、香拵えの時、敷紙の上、組み付け図

[図]

中立後、乱箱組付の図



此如く組付て
香拵の天井に
置也

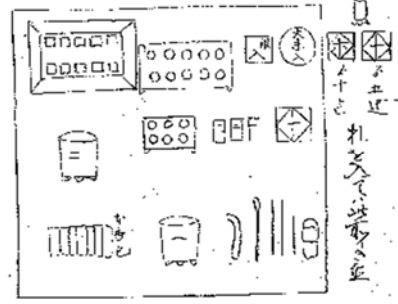
中立後、乱箱組み付けの図

[図]

この如く組み付けて
香拵の天井に
置くなり。

十炷香数紙の圖

源平香 競馬香
 名所香 矢数香
 乱数紙共此圖と
 同
 其外札に此香皆此
 組付と同

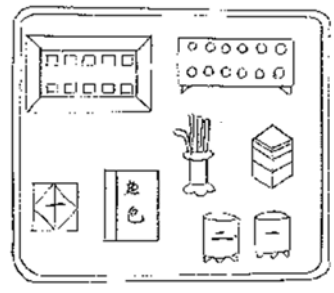


十炷香数紙の圖

源平香 競馬香
 名所香 矢数香
 乱箱、数紙共にこの圖と
 同し。
 そのほか、札にて聞香、皆この
 組み付けと同じ。

[圖] 札を入れてはこの所に置く。

花月香乱箱飾りの圖



真の時火筋瓶に
 六種立つべし
 火筋 灰押
 羽箒 香筋
 銀挟 鶯

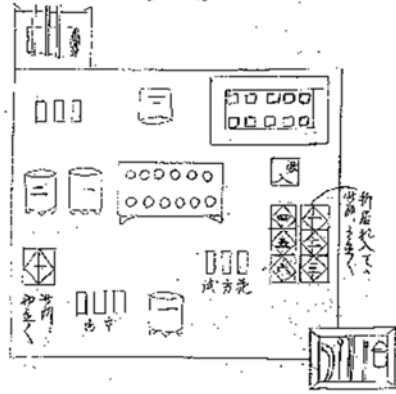
花月香乱箱飾りの圖

[圖]

真の時は火筋瓶に
 六種立つべし。
 火筋 灰押
 羽箒 香筋
 銀挟 鶯

花月香敷紙の圖

香元二人向ひ合
 花方が試み立ちむ
 月方試み終りて返す時
 香爐を花方へ直す

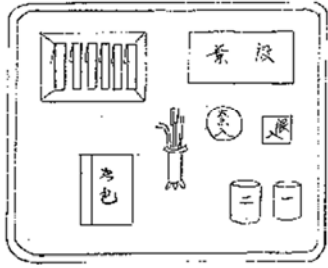


花月香敷紙の圖

香元二人向かい合ひ
 花方より試み立てはじむ。
 月方、試み終りて返す時
 香炉を花方へ直す

[圖] 折居、札入れては
 この所に置く。

宇治山香乱箱飾りの圖



鳥合香 郭公香
 小草香
 何れも乱箱組み付け、宇治山
 香と同じ。
 札を不用、名乗紙にて
 聞香は何れも此圖の組み付
 けを用いるなり。

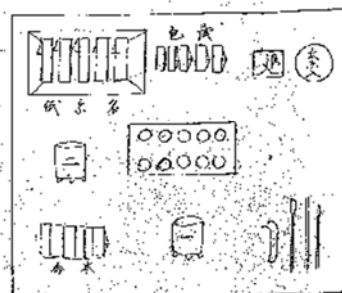
宇治山香乱箱飾りの圖

[圖]

鳥合香 郭公香
 小草香
 何れも乱箱組み付け、宇治山
 香と同じ。
 札を用いず、名乗紙にて
 聞香は何れもこの図の組み付け
 を用いるなり。

宇治山香紙の図

小草香 烏合香
 行き此圖と同じ。但し、鶯を
 用いる故、香筋の脇に鶯を置
 くなり。
 郭公香は、試み無き故に、この図
 の試包なるべし。
 宇治山香は本香只一炷
 なれば、鶯を用いず。

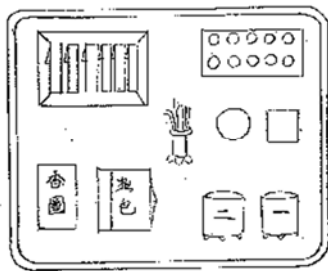


宇治山香紙の図

小草香 烏合香
 何れもこの図と同じ。但し、鶯を
 用いる故、香筋の脇に鶯を置
 くなり。
 郭公香は、試み無き故に、この図
 の試包なるべし。
 宇治山香は本香只一炷
 なれば、鶯を用いず。

[図]

小鳥香乱箱の圖



源氏香
 系図香
 行き此亂箱組付
 此圖の如し。

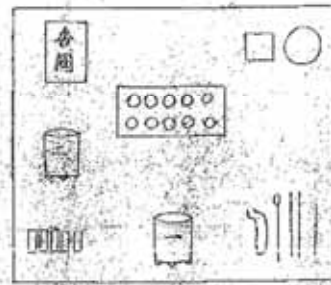
小鳥香乱箱の圖

[図]

源氏香
 系図香
 何れも乱箱組み付け
 この図の如し。

小鳥香数紙の圖

源氏香
系圖香
何れも数紙
世圖のや



此介花月香 真の飾 焚合十炷香 連理香也と三秘の香と
ニ礼箱組升高紙 香元盤の飾 等 秘事故後より
競馬 香 矢数香 具介疊お礼名表の組付 何れも十炷香の
組付と同一

小記の事

初座香拵の節 客へ出香を乞うて其香と二三つと組付香
の銘と香主の名を認めるなり。まず、時(季)の銘の香と一の香に定め
て次々、何れなりとも、同姓と見えぬ香を組むべし。客の香は聞き安
からんが為に宜しき香を組むべし。

小鳥香数紙の圖

源氏香
系圖香
何れも数紙
この図の如し。

[図]

小記(録)の事

このほか「花月香」真の飾り、「焚合十炷香」「連理香」これを「三秘の香」と
云う。乱箱組み付け、敷紙、香元盤の飾り等、秘事故ここに下さず。
「競馬香」「矢数香」そのほか、盤物、乱箱敷の組み付け、何れも十炷香の
組み付けと同一。

初座、香拵之の節、客へ出香を乞うて、その香を「一」「二」「三」「ウ」と組み付け、香
の銘と香主の名を認めるなり。まず、時(季)の銘の香を「一の香」に定め
て次々は、何れなりとも、同姓と見えぬ香を組むべし。客の香は聞き安
からんが為に宜しき香を組むべし。

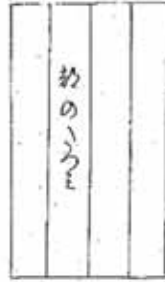
行書の台紙
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十
寸法 縦三寸七分 横五寸
小記 録紙は常に調え置くべし。
月日 行号

加此の後の本記 録紙をどうも

寸法 縦三寸七分 横五寸

小記 録紙は常に調え置くべし。

名乗紙の事 手記録とも云う



札を折ぬ香に名乗紙を用ゆ。面々に思いよりの聞きを書くなり。この如く四つに折り、三つ折り目に書く。畳みて先を折り、下に名乗を書くなり。



名乗紙の寸法を大抵奉書と八つ切りして用ゆ。伝にあり。奉書と四つ切るとあれども、あまりかさばつて悪し。

敷紙の事

白紙を本とす。大高を用ゆべし。本式はかけながしの物なり。金銀の箔おしを用いるは略なり。これは永く用ゆる為なり。金の方は春夏銀の方は秋冬、また、昼は金、夜は銀の方を用いるなり。

香拵の大きさ寸法

組香、空焚きともに銘香は用いず。新渡りの奇南を用ゆ。組香は長さ二分、横二分、厚さ五厘。これは、いにしへの法なれども、当流にては一分

[図] この如くに認め、後に本記録に移すなり。

寸法 縦三寸七分 横五寸

小記録紙は常に調え置くべし。

名乗紙の事 手記録とも云う

[図]

札を用いぬ香に名乗紙を用ゆ。面々に思いよりの聞きを書くなり。この如く四つに折り、三つ折り目に書く。畳みて先を折り、下に名乗を書くなり。

名乗紙は、寸法なし。大概奉書を八つ切りにして用ゆ。伝にあり。

奉書を四つに切りてとあれども、あまりかさばつて悪し。

敷紙の事

白紙を本とす。大高を用ゆべし。本式はかけながしの物なり。金銀の箔おしを用いるは略なり。これは永く用ゆる為なり。金の方は春夏銀の方は秋冬、また、昼は金、夜は銀の方を用いるなり。

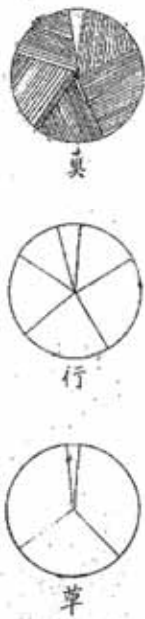
香拵の大きさ寸法

組香、空焚きともに銘香は用いず。新渡りの奇南を用ゆ。組香は長さ二分、横二分、厚さ五厘。これは、いにしへの法なれども、当流にては一分

半四方はよく工物よ、木の堅横しれざる様の為なり。組香は
 早よりと、是本の堅横吟味まじり、陸入てあり。□□口口大概
 皆後なり。供香、空焚は、御家流古来の法は、長四分、横三分、厚さ
 一分。宗信の説も右に同じ。建部隆勝は、長さ三分、横二分、厚さ一分
 とし、近來、これに順う名香は、古今ともに馬尾三分、また、蚊脚ほど
 とし、口口大概これ程なり。

灰押板の事

香爐のせりわたり、少高くかきあげて押すべし。志野宗信曰
 灰香爐にわたり、灰五合、おき、香翫の箸とて、子細候とす。



此御家流香爐古來より、押方之志野に至りて宗入香爐の圖
 奥に灰の押し方様と有り。然れども「賞翫の箸目」を付す。これは箸目
 秘して書きたるなるべし。今世、他流の灰に「賞翫の箸目」なし。
 是後世の伝へ失い成るべし。右の図は、御家古来の法にして、この
 介ハ塔崎の志作と心得べし。香爐、置前の足に箸目二筋
 付ける。これを「賞翫の箸」と言うなり。宗信が「賞翫の箸とて子細候」と
 云いしもこれなり。

半四方につくる。作るには、木の堅横しれざる様の為なり。組香は
 早をよしとす。木の堅横吟味すれば障り入りてあしし。「口口」大概
 この位なり。供香、空焚は、御家流古来の法は、長四分、横三分、厚さ
 一分。宗信の説も右に同じ。建部隆勝は、長さ三分、横二分、厚さ一分
 といえり。近來、これに順う名香は、古今ともに馬尾三分、また、蚊脚ほど
 と言ふ。「口口」大概これ程なり。

灰押し様の事

香爐の「せがみ」(背涯※)より少高くかきあげて押すべし。志野宗信曰く、
 聞香爐にかぎり灰五合におす。賞翫の箸とて子細候とす。

※「御家流百ヶ條口授傳」にこの当て字あり。

〔図〕

これ御家聞香爐、古來よりの押し方なり。志野に至りて宗入、香爐の圖
 奥に灰の押し方様に有り。然れども「賞翫の箸目」を付す。これは箸目
 秘して書きたるなるべし。今世、他流の灰に「賞翫の箸目」なし。
 これ後世の伝へ失い成るべし。右の図は、御家古来の法にして、この
 ほかは皆、略の志作と心得べし。香爐、置前の足に箸目二筋
 付ける。これを「賞翫の箸」と言うなり。宗信が「賞翫の箸とて子細候」と
 云いしもこれなり。

記録記帳の事

端作りは「何香の記」と書き香組を主ならず其札の紋は「二葉花
 と梅」とし「たぐ」松竹梅桜橘などの類は「老松」「緑松」「紅梅」
 「白梅」「寒梅」「呉竹」「若竹」「緑竹」「山桜」「遅桜」「玉椿」「姫椿」など
 書く。杜若「山吹」「水仙」などの類は二字なれば、そのままにてよし。札紋の
 肩に名乗りを書き、貴人の御名をば、御諱(いみな)をかかず、御号を書くべし。
 札紋より一字あげて書き、地下は札紋より一字宛下げて書く。貴人御両
 人の時は、御名乗を書くなり。もつとも、一字上げて書くなり。御相伴の者は、一字
 下げて書くなり。同輩ばかりの時は、面々の名乗りを札紋とならべて書くべし。婦人
 の名をば「何女」と云う。貴人、官女は「何子」と書く。貴人の御当り数を「何炷」
 と書き、地下、同輩は「五、六、七」と数の字ばかり書く。客を聞きたるは教字
 と書地下同輩は「五六七」と教の字は「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十」と

の脇に「内ウ」と書き、儀式の時は「年号」も書く。常は「千支月日」ばかりにて
 よし。月日の下には「誰亭に会す」と書き、「出香誰」と書く。儀式の時は、
 香元も「誰」と書くべし。「十炷香」の一名「三葉一花」と書く事も、当
 り数、悉く皆聞きたるをば「皆」と書くなり。残らず聞きたるを「つづ」と云う
 は「つづき」と云う言葉の下略なり。一炷もあたらざるを「無」と云う。執
 筆の人、能々心得べし。

記録の図

記録認め様の事

端作りには「何香の記」と書き、香組をその下に書き、札の紋は二字宛
 に認むべし。たとへ「松、竹、梅、桜、椿」などの類は「老松」「緑松」「若松」「紅梅」
 「白梅」「寒梅」「呉竹」「若竹」「緑竹」「山桜」「遅桜」「玉椿」「姫椿」などと
 書くなり。「杜若」「山吹」「水仙」などの類は二字なれば、そのままにてよし。札紋の
 肩に名乗りを書き、貴人の御名をば、御諱(いみな)をかかず、御号を書くべし。
 札紋より一字あげて書き、地下は札紋より一字宛下げて書く。貴人御両
 人の時は、御名乗を書くなり。もつとも、一字上げて書くなり。御相伴の者は、一字
 下げて書くなり。同輩ばかりの時は、面々の名乗りを札紋とならべて書くべし。婦人
 の名をば「何女」と云う。貴人、官女は「何子」と書く。貴人の御当り数を「何炷」
 と書き、地下、同輩は「五、六、七」と数の字ばかり書く。客を聞きたるは教字

の脇に「内ウ」と書き、儀式の時は「年号」も書く。常は「千支月日」ばかりにて
 よし。月日の下には「誰亭に会す」と書き、「出香誰」と書く。儀式の時は、
 香元も「誰」と書くべし。「十炷香」の一名「三葉一花」と書く事も、当
 り数、悉く皆聞きたるをば「皆」と書くなり。残らず聞きたるを「つづ」と云う
 は「つづき」と云う言葉の下略なり。一炷もあたらざるを「無」と云う。執
 筆の人、能々心得べし。

※ 「つづ」「は」「十」のことも言われている。

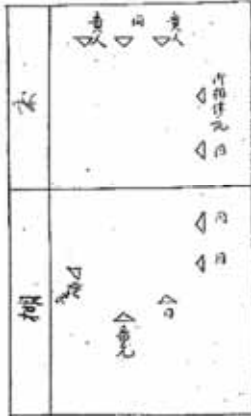
記録の図



十炷香正伝の習あり具(つづき)には
書き付けがたし。口授すべし。

記録点法は、認め終りて一座中の
宗匠たる人に点を乞うべし。

貴人御座の會御席設けの圖



此圖は左勝手なり御取次の人御取次をいたすなり

座敷の勝手より
這ひ入り御座を
大概此圖を以て
左略して席を
設けべし。

「十炷香之記」

無試十炷香正伝の習いあり。具(つづき)には
書き付けがたし。口授すべし。

記録点法は、認め終りて一座中の
宗匠たる人に点を乞うべし。

貴人御座の會 御席設けの圖

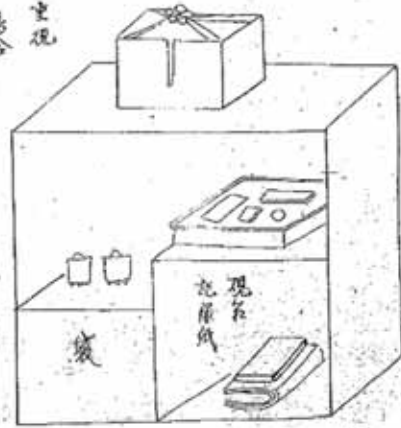
〔圖〕

座敷の勝手により
違いあり。然れども
大概この図を以て
左略して席を
設けべし。

この図は、左勝手なり。執筆の人、御取次をいたすなり。

香棚初座の飾り

十炷香箱尚香の
結びをして横に図を通
置くなり
袋の内
たどん箱 源氏図 重硯
香盆 香筋立 香合



香棚初座の飾り

十炷香箱、当季の
結びをして、横に図の通り
置くなり。

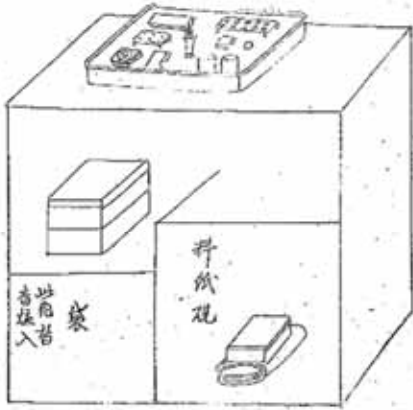
袋の内

たどん箱 源氏図 重硯
香盆 香筋立 香合

[図]

香棚後座の飾り

乱箱の内、組み付けは
はじめに図を出す
十炷香箱袋を取り
て竖に置く

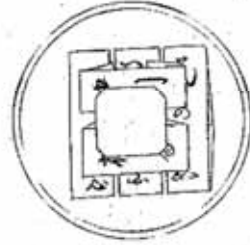


香棚後座の飾り

乱箱の内、組み付けは
はじめに図を出す。
十炷香箱袋を取り
て竖に置く。

[図]

香合香と入風



香五種

下ニ二包

上ハ二包

横竖ニ置上ヤ

銀葉一枚たくく

御家流香道百ヶ條 第拾條 香席上座の事

御家流は、香元右の方の初座と上座とをなすなり。即ち貴人の時は、向こう中央上座と是定まらばといふも座敷勝手により貴人、香元の左に付給いつつ、その方を上座とすべし。常例は、香元の右が客の左座なり。これを上座とす。「舞樂香」「競馬香」等の左というは、すべて香元の右の方を云うなり。

同書第三條に載する所
香席詞づかいの事

香が火入るるといふと云ふ 香爐の中の火の出すを「放つ」と云ふ。銀葉に香をのせるを「香をおく」と云ふ。取り去るを香を「あぐる」と云ふ。

香合香を入れる図

香五種

下に 三包

上は 二包

横竖に置き、上に

銀葉一枚おくなり。

御家流香道百ヶ條口授傳 第拾條に載する所

香席上座の事

御家流には、香元、右の方の初座を上座とするなり。別して貴人の時は、向こう中央上座なり。これ定たる法といえども座敷勝手により貴人、香元の左に付給いつつ、その方を上座とすべし。常例は、香元の右が客の左座なり。これを上座とす。「舞樂香」「競馬香」等の左というは、すべて香元の右の方を云うなり。

同書第三條に載する所

香席詞づかいの事

香炉に火入るるを「とる」と云う。香爐の中の火を出すを「放つ」と云う。銀葉に香をのせるを「香をおく」と云う。取り去るを香を「あぐる」と云う。

銀葉より落ちたるを「はしる」と云う。香を焚き客へもどすを「香を
 繼ぐ」と云う。筒に札を入れるを「打つ」と云う。香一べん済むを「満つる」と云う。香炉
 二つは「一對」、一つは「隻(せき)」と云う。銀狭、香箱、香包、折居、火筋瓶、札筒、香袋、
 銀葉入、火末入等は「一つ、二つ」と云う。香筋、火筋は「一揃、二揃」と云う。
 灰押、鶯、羽箒、香救は「一本、二本」と云う。銀葉を「一片、二片」と云う。
 銀葉盤、立物盤、この類は「一面、二面」と云う。

香席法度の事

- 一 香会に出るに身は薰物を焚き、並びに皮足袋はく事
- 一 香中は(半ば)に用所に立つべからず
- 一 香中は、扇つかうべからず。然れども暑の時分は、扇つかひ候とも
 「そろそろ」と分別して遣(使)うべき事
- 一 香満つるまで、高声、雑談、自余の嘯する事
- 一 香炉あらく取り扱うべからず
- 一 功者ぶりにて麈末に聞くべからず。久しく聞きもあしし。次々へ不
 (無)礼なり。一種聞きは五息、七息。組香は三息と心得べし。
- 一 香を聞く時に灰を見るべからず
- 一 人とさきやき、談合して札打つべからず。並びに打ちたる札、取かゆ
 る事、香炉、取り戻し聞くべからず
- 一 番あやまりて灰へ落ちたる時は、香元へたのみて直すべし。
 自身なおすべからず
- 一 香会の席には、猥りに飾りを手に取り見るべからず。飾りのまま
 見るべし。

- 一 暑氣の節たりとも、餘りに障子開くべからず。並びに乱座に居(すわ)るべからず。
- 一 兼約の刻限たがうべからず。遲滞の事あらば、断り申すべし。不定にいふべからず。
- 一 香前に諷事をし、大声を發すれば、香を聞きて氣遠く成るなり。香前に飽食、大酒すれば聞きを忘るるなり。
- 一 香会の席にてみだりに秘事を問うべからず。聞たき事あらば、常に尋ねて習うべし。
- 一 香会の節、掛物に聖像、仏像、祖師等の絵を掛けるべからず。花鳥山水などを用ゆべし。
- 一 会席料理にも菓子にも山椒、柚、みかんの類、すべて香ひ(匂い)のつき物を用いず。座敷にも梅、菊の類、香りつよき花を生けず。
- 一 我焚きし名香を人ほめ候時、ひげ(卑下)すべからず。名を聞かば、あらは(露わ)にいうべし。
- 一 香席に貴人あるとも、縁にて香聞くべからず。
- 一 十種香の箱、常にも開き、会に客所望して見る時は、香終りて一、二種(乞)て見るべし。ことごとく見るべからず。心得有るべき事なり。見終りて、箱と袋と別々に返すべし。

【欄外注記】

○松男云わく、この香席法度の事は、御家流香道百ヶ條口授伝第十六條に載せたる香席法度事とその条目並び順序、少異なる所ありと雖も、その義に到りては、素(もと)より同一なる物なり。今人、彼の『百ヶ條口授傳』中の法度の義と異同如何ならんとか之思ふ、ふしもあらんとて、**抄**(すこしく)これをことわりおくに事無し。

○松男云々の香席法度事、其の條目順序、御家流香道百ヶ條口授伝第十六條に載せたる香席法度事と其の條目順序、少異なる所ありと雖も、その義に到りては、素(もと)より同一なる物なり。今人、彼の『百ヶ條口授傳』中の法度の義と異同如何ならんとか之思ふ、ふしもあらんとて、**抄**(すこしく)これをことわりおくに事無し。

百柱香會法式

兼て奥文を以て人数を催すべし。当日の飾りは床に掛物、花も生け置き、また、香棚を飾り付くべし。香棚、志野棚または御厨子、違棚に飾るもよし。後座の飾りにするなり。初座、香持えすれば隙(時間)取りて百柱は聞かれず。前に「無試十炷香」十組拵えて置き、または客の人数に応じ、一組宛持参を申し遣わすべし。さて、棚の上、乱箱の組み付けは十炷香乱箱のごとくして、中棚、左の方に重硯一組、竪に置き右の方に長盆に組香惣包五つ、「無試十炷香」五組入れ置くなり。名乗紙五結、連中の人数程一結びにするなり。この二包を長盆に載せ中棚に置き、下には料紙、硯、記録紙を置くなり。さて、刻限に至りて、各(客)来りて座敷に通る、掛物、花飾り等を見て、順々に着座する時、亭主出て、主客挨拶終り「御香始め申すべき」旨を述べ、この時、手水に立つなり。順々に手水相済ませ着座す。その時、亭主、香棚に向かい料紙、硯を取りて執筆に渡す。執筆、請け取り傍らに置く。次に、重硯をおろし上座へ出す。上客、請け取り順々に達すべし。それより乱箱をおろし、香元座の左の方に置き、次に長盆をおろし、香元の前、敷紙だけあけて向こうに置く。さて、敷紙をひろげて乱箱より道具を取り出し、順々に飾り付け、乱箱を少し後へし(下げ)、それより執筆に乞いて硯の蓋をとり、一の名乗紙、硯の蓋に入れ、上座へ出す。上座請け取り、次へ会釈して順々に取りて下座へ廻る時、香元へ返す。香元請け取り、執筆に遣わす。この時、香元、執筆に会釈すべし。執筆、勝手に立ちて火取香炉を持参す。この間に火筋、灰押、羽箒を香巾にてふきならべ、香炉の下火と火取の炭団と入れ替へ

兼て奥文を以て人数を催すべし。当日の飾りは床に掛物、花も生け置き、また、香棚を飾り付くべし。香棚、志野棚または御厨子、違棚に飾るもよし。後座の飾りにするなり。初座、香持えすれば隙(時間)取りて百柱は聞かれず。前に「無試十炷香」十組拵えて置き、または客の人数に応じ、一組宛持参を申し遣わすべし。さて、棚の上、乱箱の組み付けは十炷香乱箱のごとくして、中棚、左の方に重硯一組、竪に置き右の方に長盆に組香惣包五つ、「無試十炷香」五組入れ置くなり。名乗紙五結、連中の人数程一結びにするなり。この二包を長盆に載せ中棚に置き、下には料紙、硯、記録紙を置くなり。さて、刻限に至りて、各(客)来りて座敷に通る、掛物、花飾り等を見て、順々に着座する時、亭主出て、主客挨拶終り「御香始め申すべき」旨を述べ、この時、手水に立つなり。順々に手水相済ませ着座す。その時、亭主、香棚に向かい料紙、硯を取りて執筆に渡す。執筆、請け取り傍らに置く。次に、重硯をおろし上座へ出す。上客、請け取り順々に達すべし。それより乱箱をおろし、香元座の左の方に置き、次に長盆をおろし、香元の前、敷紙だけあけて向こうに置く。さて、敷紙をひろげて乱箱より道具を取り出し、順々に飾り付け、乱箱を少し後へし(下げ)、それより執筆に乞いて硯の蓋をとり、一の名乗紙、硯の蓋に入れ、上座へ出す。上座請け取り、次へ会釈して順々に取りて下座へ廻る時、香元へ返す。香元請け取り、執筆に遣わす。この時、香元、執筆に会釈すべし。執筆、勝手に立ちて火取香炉を持参す。この間に火筋、灰押、羽箒を香巾にてふきならべ、香炉の下火と火取の炭団と入れ替へ

時、亭主出て、主客挨拶終り「御香始め申すべき」旨を述べ、この時、手水に立つなり。順々に手水相済ませ着座す。その時、亭主、香棚に向かい料紙、硯を取りて執筆に渡す。執筆、請け取り傍らに置く。次に、重硯をおろし上座へ出す。上客、請け取り順々に達すべし。それより乱箱をおろし、香元座の左の方に置き、次に長盆をおろし、香元の前、敷紙だけあけて向こうに置く。さて、敷紙をひろげて乱箱より道具を取り出し、順々に飾り付け、乱箱を少し後へし(下げ)、それより執筆に乞いて硯の蓋をとり、一の名乗紙、硯の蓋に入れ、上座へ出す。上座請け取り、次へ会釈して順々に取りて下座へ廻る時、香元へ返す。香元請け取り、執筆に遣わす。この時、香元、執筆に会釈すべし。執筆、勝手に立ちて火取香炉を持参す。この間に火筋、灰押、羽箒を香巾にてふきならべ、香炉の下火と火取の炭団と入れ替へ

かしあけて灰押と上座へ火加減を伺ふ上客請け取り、二客に相談
 して「宜しかるべし」と挨拶して香元へ返す。香元請け取り、箸目を付け、仕舞い
 羽箒にて香炉は(掃)く時、上客より「御箸目拝見」と乞ひ、則ち出すを
 上客、香炉取り揚げ真中へ皆々打ち寄り灰を見る内、二の炉を灰
 致す。灰出来して二の炉の座へ置き付け、一の炉を香元へ返す。
 「見事なる」由挨拶す。それより香中畳みて、火筋を火筋瓶にさ
 す。次、手に銀挟をとり、ふきて火筋の跡へ置く。灰押をとり
 香救ととり替へ、ふきて置く。羽箒をとりて香筋とかえ、ふきて
 置き、鶯を取りてふきならば、銀葉入を取り銀挟みにて銀葉を銀葉
 盤の上にならば、銀葉入を元の座へ直し、さて、香炉を取り揚げ火
 加減を誂み、下に置く。銀葉を灰の上に「ろく」に置き、銀挟を下
 におきて「御香焚き初め申す」挨拶す。客、皆頓首す。それより焚出す。

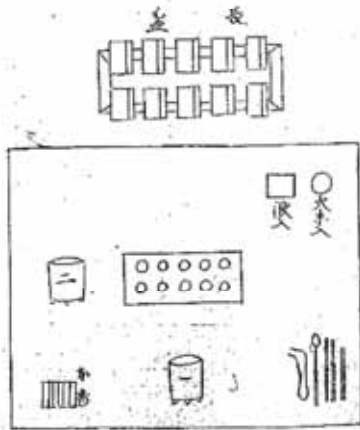
事、常の如し。客人數、五人迄は一炉にてよし。一組の香終わる頃、執
 筆に会釈すべし。執筆立ちて火取る。後座の香炉の火を持参し、
 ほかの香炉にとり、灰かきあげて待つなり。一組終りて硯蓋を上
 客へ遣わす時、銘々名乗紙を戴せ、順達して香元へ返る時、一つ
 にして鶯にさしたる香包をぬき取り、こよりにて一つにとぢ(綴)、右
 の名乗紙と重ねて長盆へ戻す。さて、執筆の灰をかき揚げお
 きたる香炉を取り、灰を押し箸目「さつ」と付ける。この度は客も灰相
 見を乞う事なし。さて、次の組を焚き出す事、前のごとし。この如く
 する事、五度にして長盆にのせ置きし五組の香残らず終りて
 する事なり。この間に執筆、五組の記録を認めるなり。香元は、敷紙
 の上の飾りを一々乱箱へ入れ、客に向いて「会席出すべく」挨拶し、香中
 を敷紙の間に畳み込み、勝手へ入り、会席を出す。会席済後

座に掛るなり

廻り始めの如く札を飾きし長盆も又新ごみ五組の如く入替各乗紙も初めのかうして入替り後座各々又前の如く座をさしてあ。五組の香をさすなり。執筆また五組の記録を認めてはじめの記録と一つにして宗匠の人は点を乞うべし。亭主は、記録認める内に道具を仕舞いて乱箱、重硯等、元の如く棚へ飾り付けるなり。

大の会は、札を用いず。札を用ゆれば隙取りてあしし。名乗紙を用ゆ。この会は、志野省巴の時より初め侍りしと云う。西三條右大臣公條公
社名院殿の御言葉書きなり

百柱会香元之圖



百柱会香元の図

[一四]

座に掛るなり。

さて、はじめの如く乱箱を飾り直して、長盆もまた新たに五組の惣包を入れ替え、名乗紙も初めの如くに入れ置くなり。後座各々また前の如く座に着きて、残る五組の香聞くなり。残らず終りて、執筆また五組の記録を認め、はじめの記録と一つにして宗匠の人に点を乞うべし。亭主は、記録認める内に道具を仕舞いて乱箱、重硯等、元の如く棚へ飾り付けるなり。

右の会は、札を用いず。札を用ゆれば隙取りてあしし。名乗紙を用ゆ。この会は、志野省巴の時より初め侍りしと云う。西三條右大臣公條公
社名院殿の御言葉書きなり。

百炷香次第進世香札打盤勿用て用之むるはとよく
諸流用之く

札打盤圖 寸法定まらず 堅十間 横十一間



- 一 表に横さし蓋なり
- 一 裏は縦さし蓋なり
- 一 札打つときは、初め「一」札打つこと故、表札紋に合せて打つなり。札紋を返して「一」の方を出して、初め一間目打つなり。二間目よりは、札紋にて打つ事なり。
- 一流札相済み、表の横蓋をしめ、引き返して、裏の堅蓋を引きあげて、本香を開き、十一間目へ本香の札打ち申し候。
- 一本香札と引合せ、中り札へ豆にても何にても印しを入れるなり。数を改めて、記録へこれを写すなり。
- 記録一枚にて相済み、銘々写し返ることなり。

[図]

百炷香聞き様、近世、香札打盤出来て用ゆなり。至つて手廻しよく
諸流これを用ゆなり。

札打盤圖 寸法定まらず 堅十間 横十一間

→この間に本香札打ち候

- 一 表に横さし蓋なり。
- 一 裏は縦さし蓋なり。
- 一 札打つときは、初め「一」札打つこと故、表札紋に合せて打つなり。札紋を返して「一」の方を出して、初め一間目打つなり。二間目よりは、札紋にて打つ事なり。
- 一流札相済み、表の横蓋をしめ、引き返して、裏の堅蓋を引きあげて、本香を開き、十一間目へ本香の札打ち申し候。
- 一本香札と引合せ、中り札へ豆にても何にても印しを入れるなり。数を改めて、記録へこれを写すなり。
- 記録一枚にて相済み、銘々写し返ることなり。

組香稽古口授傳

御家流香道稽古は昔より口傳口授にて教へ傳へり也
 木所は覺えん為組香と仰の習と仰ぬより或は前々
 稽古の矩を守り事勸(肝)要なり。式を疎かにして木所の
 争ひの趣となり。昨傳口授は法度區々にして流
 儀の系筋を失ふ事嘆きて組香之段、稽古の式を記
 すとの余は、掟書に順て習うべし。

一 平日の稽古は、香会式を学ぶ事なれば、床飾り、棚飾り、乱
 箱組み付け、火取香、生花等、その心遣い有るべく候なり。

一 前座木拵の式は、平日の稽古には及ばざる義なれども、兼ての調へ
 なくては不時の香席につまつき残るに、初心の人に香会
 の趣意を弁せず、料理の事も折々には、そのならし有るべきものなり。

組香稽古口授傳

御家流香道稽古は、昔より口伝、口授にて教え、来申すなり。
 木所、聞き覚えん為に組香を初の習とす。初心より式を正しく、
 稽古の(規)矩を守る事、勸(肝)要なり。式を疎かにして木所の
 争ひのみ興となり、師伝、口伝、末々法度、区々にして、流
 儀の系筋を失なえる事嘆きて組香の段、稽古式を記し
 置くのみ。余は、掟書に順いて習うべし。

一 平日の稽古は、香会式を学ぶ事なれば、床飾り、棚飾り、乱
 箱組み付け、火取香、生花等、その心遣い有るべく候なり。

一 前座木拵の式は、平日の稽古には及ばざる義なれども、兼ての調へ
 なくては不時の香席につまつき残るに、初心の人に香会
 の趣意を弁せず、料理の事も折々には、そのならし有るべきものなり。

- 一 檀古といふとも兼ねて法度の義は勿論、香席連座以前に手水の事、努々失念これ有る間敷なり。
- 一 香席、火鉢、多葉粉盆、制なり。ほかに座席無しは、これ非無き次第なり。その心遣いこれ有るべき義なり。(多葉粉盆↓煙草盆)
- 一 炉風呂、一座にこれ有るとも、焚物、薫物等は遠慮すべき戒めなり。一香に蠟燭は用いず。油火の事、古よりの掟なり。その心遣いこれ有るべく候なり。
- 一 香式法度、常々檀古所に掟書張(貼)り出し置き申すべきなり。
- 一 記録、座順等は、すべて師の差図(指図)に任せ、**仕義**により圖にて定まる事もあるべし。(仕義↓事のなりゆき)
- 一 檀古といふとも補助、執筆の事、座人前に定め、連衆少くば、両役一人兼合い候義は、**仕義**すべきなり。
- 一 記録の事は、執筆の役といえども、その節の香元、認める事もあるべし。点法の儀は、檀古といふとも師匠のほか猥りに致す間敷候。師の差図によつては格別たるべし。
- 一 香組終りて札をならべる事は、補助の役なり。香元にて式の通りならべる時は数多く、聞く時の手廻しに宜しからず。よつてこの如し。
- 一 香中、無**抛**退座の事有らば、香元補助へ連外の旨を行い、退座いたすべく、隣座に札小箱を預け、猥りに退座の義、堅くこれを禁ず。
- 一 檀古といふとも香終りて記録に至り、宗匠の点法相済み、上席より記録終りて、香元一礼頓首済みて、香連衆挨拶有りて香席上客より順々に退座致すべき教えなり。

- 一 檀古といふとも兼ねて法度の義は勿論、香席連座以前に手水の事、努々失念これ有る間敷なり。
- 一 香席、火鉢、多葉粉盆、制なり。ほかに座席無しは、これ非無き次第なり。その心遣いこれ有るべき義なり。(多葉粉盆↓煙草盆)
- 一 炉風呂、一座にこれ有るとも、焚物、薫物等は遠慮すべき戒めなり。一香に蠟燭は用いず。油火の事、古よりの掟なり。その心遣いこれ有るべく候なり。
- 一 香式法度、常々檀古所に掟書張(貼)り出し置き申すべきなり。
- 一 記録、座順等は、すべて師の差図(指図)に任せ、**仕義**により圖にて定まる事もあるべし。(仕義↓事のなりゆき)
- 一 檀古といふとも補助、執筆の事、座人前に定め、連衆少くば、両役一人兼合い候義は、**仕義**すべきなり。
- 一 記録の事は、執筆の役といえども、その節の香元、認める事もあるべし。点法の儀は、檀古といふとも師匠のほか猥りに致す間敷候。師の差図によつては格別たるべし。
- 一 香組終りて札をならべる事は、補助の役なり。香元にて式の通りならべる時は数多く、聞く時の手廻しに宜しからず。よつてこの如し。
- 一 香中、無**抛**退座の事有らば、香元補助へ連外の旨を行い、退座いたすべく、隣座に札小箱を預け、猥りに退座の義、堅くこれを禁ず。
- 一 檀古といふとも香終りて記録に至り、宗匠の点法相済み、上席より記録終りて、香元一礼頓首済みて、香連衆挨拶有りて香席上客より順々に退座致すべき教えなり。

- 一 香席居まい、その座敷によつて香元座取り、連衆の着座
- 置目行儀、香炉、札箱、折末、次々へ送る次第、始めより終りまで置き所、違がわぬ様に心得候なり。
- 一座詞遣い、必法の通りなり。不熟の儀、初めて香聞く人へ助言の儀は、補助より申すべきなり。あれこれと助言これ有り候ては、行届かず。諸事の義、心附け、補助の役なり。
- 一 香中飲食、努々堅くこれを禁ず。
- 一 香木所不審の儀、その座の出香、香元へ伺い、札打ち候事は、制なり。もし、心得がたき義は、その節の補助に承るなり。香中、口上にて木所の押合は制なり。補助に承り候とも、札にて密にこれ承るべきなり。
- 一 香中、つばき(唾)、鼻かみ候わば、次の間へ退き、必ず手水致し、座入申すべく候なり。

- 一 札にて聞き候香組十炷香を初め、香元、連衆の心得は、香会式の通り、手続前後、座中立等は、稽古の申合次第。常々は、後座ばかりの式なり。香元着座して毛せんを敷くなり。乱箱を取りて法の通りこれを置く。それより数紙へ道具飾付くなり。連衆も記録をみて、名順に着座す。火取香炉、補助持ち出し候事も式の通りなり。または、着座の前、香元、香炉、箸目とも調べ置き座入の事もこれ有候なり。稽古には、箸目相見、まずはこれ無く候えども、その時は連衆より箸目の挨拶はこれ有るべき義なり。一組相済み、直ぐにほかの人焚き候節は、乱箱道具組み入れ、香元退座、毛せんはそのままに差し置き退き、そのほか替る事なし。
- 一 手記録にて聞く香も相替る事なし。乱箱の内道具、法の通り組替え、不用の道具は、十種香箱へ仕舞い、そのほかは法の

- 一 香席居まい、その座敷によつて香元座取り、連衆の着座
- 置目行儀、香炉、札箱、折末、次々へ送る次第、始めより終りまで置き所、違がわぬ様に心得候なり。
- 一座詞遣い、必法の通りなり。不熟の儀、初めて香聞く人へ助言の儀は、補助より申すべきなり。あれこれと助言これ有り候ては、行届かず。諸事の義、心附け、補助の役なり。
- 一 香中飲食、努々堅くこれを禁ず。
- 一 香木所不審の儀、その座の出香、香元へ伺い、札打ち候事は、制なり。もし、心得がたき義は、その節の補助に承るなり。香中、口上にて木所の押合は制なり。補助に承り候とも、札にて密にこれ承るべきなり。
- 一 香中、つばき(唾)、鼻かみ候わば、次の間へ退き、必ず手水致し、座入申すべく候なり。

- 一 札にて聞き候香組十炷香を初め、香元、連衆の心得は、香会式の通り、手続前後、座中立等は、稽古の申合次第。常々は、後座ばかりの式なり。香元着座して毛せんを敷くなり。乱箱を取りて法の通りこれを置く。それより数紙へ道具飾付くなり。連衆も記録をみて、名順に着座す。火取香炉、補助持ち出し候事も式の通りなり。または、着座の前、香元、香炉、箸目とも調べ置き座入の事もこれ有候なり。稽古には、箸目相見、まずはこれ無く候えども、その時は連衆より箸目の挨拶はこれ有るべき義なり。一組相済み、直ぐにほかの人焚き候節は、乱箱道具組み入れ、香元退座、毛せんはそのままに差し置き退き、そのほか替る事なし。
- 一 手記録にて聞く香も相替る事なし。乱箱の内道具、法の通り組替え、不用の道具は、十種香箱へ仕舞い、そのほかは法の

通多祀座より、主視補助より連衆へ配り、香終りても祀座と香元より、香盆とも補助、請け取りて、補助、読みて、執筆記録に写す。香元にて読む事もこれ有り。何れ補助は、香元の隣座に着座、一組相済み、退座の事は初めの通りなり。

一 盤立物にて聞く香の事は、盤立物、飾床、または違棚に置く。棚の事は替る事なし。補助、執筆定まる事、前の如し。補助は、香元の隣座、執筆は、その次に着座、火取香炉等、持てる事、前の如し。火取香炉、補助持ちき、香元請け取りて、補助直ぐに床前へ参り、盤立物、香元座向こうへ持参して、敷紙の向こうに置く。それより火取香炉持ち入り、また来て、盤立物、法の通り飾るなり。盤物、左右より進むは、香元の向こう横に居(据)える。向こうへ進む物は、豎に居えるなり。

一 香元、本香焼(焚)出し候節、香元、香盆を添えて出、上客より各札を法の通り次礼して香盆に載せ、順々香元へ香盆返るを補助請け取り、札残らず打ち返し見て、香元より「本香何」と答う。執筆、記録へ本香を記す。中り札を補助見合わせ、執筆に乞う。さて、その札を補助分け、盤立物の本に銘々札紋の通りならへるなり。

一 名所香に頼り候、拾式枚の札打ち切り無きの分は、残札これ有り。最初に硯箱を廻し候節、上客より次礼して小箱を取り、その内より残り札一枚、直に札盆に載せ、次へ廻し、終り迄初の通りなり。補助、立物の本へならへる事も初の如し。札の調べ方は、本香の札、香元取り返るを、香元より折末へ移し、補助へ渡すを請け取り、香元へ本香を伺い、執筆認めるを見

通り。手記録なれば、重硯、補助より連衆へ配り、香終りて手記縁を香元より香盆ともに補助、請け取りて、補助、読みて、執筆記録に写す。香元にて読む事もこれ有り。何れ補助は、香元の隣座に着座、一組相済み、退座の事は初めの通りなり。

一 盤立物にて聞く香の事は、盤立物、飾床、または違棚に置く。棚の事は替る事なし。補助、執筆定まる事、前の如し。補助は、香元の隣座、執筆は、その次に着座、火取香炉等、持てる事、前の如し。火取香炉、補助持ちき、香元請け取りて、補助直ぐに床前へ参り、盤立物、香元座向こうへ持参して、敷紙の向こうに置く。それより火取香炉持ち入り、また来て、盤立物、法の通り飾るなり。盤物、左右より進むは、香元の向こう横に居(据)える。向こうへ進む物は、豎に居えるなり。

一 香元、本香焼(焚)出し候節、香元、香盆を添えて出、上客より各札を法の通り次礼して香盆に載せ、順々香元へ香盆返るを補助請け取り、札残らず打ち返し見て、香元より「本香何」と答う。執筆、記録へ本香を記す。中り札を補助見合わせ、執筆に乞う。さて、その札を補助分け、盤立物の本に銘々札紋の通りならへるなり。

一 名所香に頼り候、拾式枚の札打ち切り無きの分は、残札これ有り。最初に硯箱を廻し候節、上客より次礼して小箱を取り、その内より残り札一枚、直に札盆に載せ、次へ廻し、終り迄初の通りなり。補助、立物の本へならへる事も初の如し。札の調べ方は、本香の札、香元取り返るを、香元より折末へ移し、補助へ渡すを請け取り、香元へ本香を伺い、執筆認めるを見

中り札を撰らみ、記録に写す事、初めの如し。この札の仕舞いも補助
 の役なり。小箱へ仕舞い香元へ渡す迄なり。折末も補助伏せ置き、乱
 箱へ道具取り入れる事初めの如し。記録認め、続いて執筆より香元へ
 請け取り、一覽して一座の宗匠へ点を乞う。宗匠、点終りて香元へ
 返すを一覽して、客順に廻す。それより、次礼して見終りて
 香元へ返るを香元請け取り、再見し、置みて、上座皆点の衆へ
 記録を渡す。それより、一座頓首して退座の事、初めの如し。
 盤立物は、補助そのまま床、違棚の内に上げるなり。稽古仕舞いの
 節は、乱箱並び硯、そのほか毛せん等、元の通り取り仕舞う事、香会
 席の通りなれば、これを記さず。
 右、平日稽古といつとも教への通り、相慎むべきものなり。

月 日

御家流香小引目録

- 一 四季香
- 一 紅葉香
- 一 難波名物香
- 一 扇争香
- 一 花雪香
- 一 四季三景香
- 一 耶卵戦香
- 一 七夕香
- 一 桜香
- 一 五月雨香
- 一 新花月香

月 日

御家流香小引目録

- 一 四季香
- 一 紅葉香
- 一 難波名物香
- 一 扇争香
- 一 花雪香
- 一 四季三景香
- 一 耶卵戦香
- 一 七夕香
- 一 桜香
- 一 五月雨香
- 一 新花月香

- 一 鶴亀香
- 一 籬香
- 一 菖蒲香
- 一 漁獵香
- 一 都春香
- 一 宇治山拾遺香
- 一 祝香

以上 拾八組

四季香

香五種

水ニ包 雲ニ包 月ニ包 嶺ニ包
各一包宛試に出す
中央ウナリ 一包試なし

右試み終りて、本香五包打ち交ぜ焚き出す。名乗紙にて聞くなり。試みに「これは水」「これは雪」と一々断わり焚き出すべし。さて、本香試みに合わせて聞きを認め出すなり。この香「春の水」「秋の月」と聞く事を第一とす。連中の聞きを記録に写し、「水」の当り幾つ、「月」の当りいくつと数をかぞえ、「水」の当り多き時は「春」の勝ちなり。「月」の当り多き時は「秋」の勝ちなり。「水」の当り、「月」の当りおなじ数なれば「持」なり。「春」の当り多き時は、記録のまゝにこの歌を書くべし。

秋ならば月待つことのうからまし桜にくらす春ぞ勝れる

(六百番歌合 藤原良経)

- 一 鶴亀香
- 一 籬香
- 一 菖蒲香
- 一 漁獵香
- 一 都春香
- 一 宇治山拾遺香
- 一 祝香

以上 拾八組

四季香

香五種

「水」ニ包 「雪」ニ包 「月」ニ包 「嶺」ニ包
各一包宛試に出す
「中央」ウナリ 一包試なし

右試み終りて、本香五包打ち交ぜ焚き出す。名乗紙にて聞くなり。試みに「これは水」「これは雪」と一々断わり焚き出すべし。さて、本香試みに合わせて聞きを認め出すなり。この香「春の水」「秋の月」と聞く事を第一とす。連中の聞きを記録に写し、「水」の当り幾つ、「月」の当りいくつと数をかぞえ、「水」の当り多き時は「春」の勝ちなり。「月」の当り多き時は「秋」の勝ちなり。「水」の当り、「月」の当りおなじ数なれば「持」なり。「春」の当り多き時は、記録のまゝにこの歌を書くべし。

秋ならば月待つことのうからまし桜にくらす春ぞ勝れる

(六百番歌合 藤原良経)

秋のあたり多時は此年と書
 花も見つ紅葉をも見つ虫の音もこゑ多く秋は勝れる
 水のあたり月のあたり数回一き時の此年と書
 春秋に思ひみだれて分きかねつ時につけつうつる心は

記録左の如し
 点星、下付、朱墨にて認す事なり。
 惣組、この通と心得べし。

四季香之記
 月 辰 水 中央
 名 香 風 雲 木 炭 中央 二
 名 香 辰 水 雲 月 中央 二
 名 香 水 水 雲 炭 中央 二
 名 香 雲 月 辰 中央 二
 春秋に思ひみだれて分きかねつ時につけつうつる心は
 于 文 月 香 記 行 号
 右 香 准

「四季香之記」

記録左の如し

点星、下付、朱墨にて認す事なり。
 惣組、この通と心得べし。

(拾遺和歌集 紀貫之)

「秋」のあたり多きは、この歌を書く。
 花も見つ紅葉をも見つ虫の音もこゑ多く秋は勝れる
 (春秋歌合 不知読人)
 「水」のあたり、「月」のあたり、数同じき時は、この歌を書く。
 春秋に思ひみだれて分きかねつ時につけつうつる心は

紅葉香 香五種

指色檀色檜色檀色
各二包宛試み出す
楓一包試み

右試み終りて、本香五包打ち文ぜ焚き出す。常の香当り一点、独聞二点
のハ二点、獨聞ハ二点、五包焚き終りて記録すべし。当り数の書き

一炷は「うすもみぢ」、二炷聞は「むらもみぢ」、三炷聞は「梢の錦」、四炷
聞は「ハしほ」、五炷聞は「千しお」、聞一つも無きは「散紅葉」

札の裏、紅葉の名所を書き。
龍田、柞杜、片丘、大原、小倉、生駒、双石、三室、初瀬、高田、
十人前、札紋のうらに

柞杜一枚、檀色二枚、檜色一枚、楓色一枚、右一人前、十人前、
うすもみぢ

此香名乗紙、ももやうり但し、名乗紙にても聞かす時、札紋、右に出
せし紅葉の名所を書き、記録左の如し



紅葉香

香五種

「柞」二包 「檀」二包 「檜」二包 「楓」二包
各二包宛試み出す
「楓」一包試み無し

右試み終りて、本香五包打ち文ぜ焚き出す。常の香当り一点、独聞二点
ウは二点、独聞は三点。五包焚き終りて記録すべし。当り数の書き
様は

一炷は「うすもみぢ」、二炷聞は「むらもみぢ」、三炷聞は「梢の錦」、四炷
聞は「ハしほ」、五炷聞は「千しお」、聞一つも無きは「散紅葉」
札の裏、紅葉の名所を書き。

龍田、柞杜（はそのもり）、片丘、大原、小倉、生駒、双岡（ならびのおか）、
三室、初瀬、高田、
十人前なり。 札紋のうらに

「柞」一枚、「檀」一枚、「檜」一枚、「楓」一枚、「散紅葉」一枚、
右一人前なり。十人前
にて五十枚なり。

この香、名乗紙にても聞くなり。但し、名乗紙にて聞く時も札紋は、右に
出せし紅葉の名所を書き、べし。記録左の如し。

「紅葉香之記」

難波名物香

香四種

螢二包 芦二包 衛二包 各一包宛
試みに出す
梅一包試みなし

右試み三包終りて、本香五包焚き出す。但し、夏は「螢」一包まし(増)、秋「芦」の香一包まし、冬は「衛」の香一包まし、春は「梅」の香一包ましなり。この時節に順いて一包まし、五包打ち交ぜ焚き出す。「梅」は、難波にて専ら賞する所なれば、初客を独聞たる人は四点、中に出たる客は二点、独聞三点。また、終に出たる客は三点掛くべし。札紋表に堀江、玉江、住吉、三津、大江、浪速、高津、芦屋、長柄、昆陽 十人分なり。

札の裏は
螢二包 芦二枚 梅二枚 以上八枚十分、十分抄也。
右札なき時は、名乗紙にても書かす。但し、付江堀江とやし、此札致し通堀江と津芦屋とを、地名を書かす。記録左の如し。

難波名物香之記	香四種
名	螢二包
名	芦二包
名	衛二包
名	梅一包
名	堀江
名	玉江
名	住吉
名	三津
名	大江
名	浪速
名	高津
名	芦屋
名	長柄
名	昆陽
名	十人分

難波名物香

香四種

「螢」二包 「芦」二包 「衛」二包 各一包宛
試みに出す

「梅」一包試みなし

右試み三包終りて、本香五包焚き出す。但し、夏は「螢」一包まし(増)、秋「芦」の香一包まし、冬は「衛」の香一包まし、春は「梅」の香一包ましなり。この時節に順いて一包まし、五包打ち交ぜ焚き出す。「梅」は、難波にて専ら賞する所なれば、初客を独聞たる人は四点、中に出たる客は二点、独聞三点。また、終に出たる客は三点掛くべし。札紋表に堀江、玉江、住吉、三津、大江、浪速、高津、芦屋、長柄、昆陽 十人分なり。

札の裏は

「螢」二枚、「芦」二枚、「衛」二枚、「梅」二枚 以上八枚、十人分八十枚なり。
右札無き時は、名乗紙にても聞くべし。但し、その時も記録には、やはりこの札紋の通り、「堀江、三津、芦屋」などと地名を書くべし。記録左の如し。

「難波名物香之記」



記録左の如し

扇を本六間宛に置き、中に「鶯」を立て、連中左右と分け、一炷
 開きにて右方当り二人左の当り、三人なれば双方けし合(消し合)にて
 左の方へ扇一間開く。右の如くにして何方にても「扇」皆開
 く方へ「扇」を取るなり。「扇」の勝負は終るとも、香は残らず聞くなり。記
 録は右の「扇」に書き、勝ちたる方、聞き多き人となるなり。

扇争香

香四種

一色二色三色各一包宛
 試み出ず
 「ウ」一包 試みなし
 組方、十炷香の通りなり

扇争香

香四種

「一」四包 「二」四包 「三」四包 各一包宛
 試み出ず
 「ウ」一包 試みなし

組方、十炷香の通りなり

「扇」巻本、六間宛に置き、中に「鶯」を立て、連中左右と分け、一炷

開きにて右方当り二人左の当り、三人なれば双方けし合(消し合)にて

左の方へ扇一間開く。右の如くにして何方にても「扇」皆開

く方へ「扇」を取るなり。「扇」の勝負は終るとも、香は残らず聞くなり。記

録は右の「扇」に書き、勝ちたる方、聞き多き人となるなり。

記録左の如し

「扇争香之記」

花雪香

香三種

花四包 雪四包 右一包宛試みに
出す 右三包試みに

右花方雪方と双方へ聞き初めるなり。花の試みは花方より聞き初め、
折居に入れ置き、香終りて記録す。「花」を「雪」と聞き、
「雪」を「花」と聞くは星一。「雪」と「ウ」と、「花とウ」と、「ウ」の聞き違ひは
星なし。「雪」、
「花」、「ウ」は何れも独聞は二点。独り外れは星二つ付けるなり。
記録の奥に勝負の歌を書くなり。「花方」勝ちたる時は

花方勝る時は
花方勝る時は
何れか勝る時

花雪香之記

花方勝る時

雪方勝る時

双方同数同じき時

花方勝る時は
雪方勝る時は
双方同数同じき時は
持と書くべし

花雪香

香三種

「花」四包 「雪」四包 右一包宛試みに
出す 「ウ」三包 試なし

「雪」の

試みは雪の方より聞き初めるなり。「花」「雪」の試み終ると本香九包打ち
交せ焚き

出す。札は、折居に入れ置き、香終りて記録す。「花」を「雪」と聞き、
「雪」を「花」と聞くは星一。「雪」と「ウ」と、「花とウ」と、「ウ」の聞き違ひは
星なし。「雪」、

「花」、「ウ」は何れも独聞は二点。独り外れは星二つ付けるなり。

記録の奥に勝負の歌を書くなり。「花方」勝ちたる時は

雪ならばいくたび袖をはらいなん
はなのふぶきの志賀の山ぐえ

「雪方」勝る時は

花ならばさかぬ梢も有なまし

何にたとへん雪のあけほの

「花雪香之記」

双方当り数同じき時は
持と書くべし

四季三景香 香四種

一ニ三各三包宛ウ一包
行も試みなり
香十炷香し通之

初ニ三の香一包包宛除き初六包の内より一包入七包
として焚き出す。初六除き二二三の内一包取て焚
也。焚き名乗紙を書き、初七の座の何番目と何
番目と書くと初七の座の何番目と何番目と何
とハニニニウと書くと初七の座の何番目と何番目と何
又と一七の座の内ニ二三ウと書くと初七の座の何番目と何
の二炷ニ二三の内より一包取ると初七の座の何番目と何
又ハニニニウと書くと初七の座の何番目と何番目と何

の出を春夏秋冬を月花と定め置き、後に一炷の出を記す時、
の香六の座(六炉目)に出候えば、「月」と書き、七の座へ候出らば、「花」と
書き、この如く出所によりて「春夏秋冬雪月花」と認めるなり。記録「ウ」と
もに三炷当りは
花と書二箇月と一炷ハ雪と書一炷も書と眠と書
名目一書

春夏ハ	蓬生	春秋ハ	八全
春夏ハ	雜波津	春夏ハ	東風
春秋ハ	曉月	春花ハ	三葉野
夏秋ハ	蟬声	夏秋ハ	氷室
夏冬ハ	雪夜	夏月ハ	平砂子
春花ハ	瀧渡	秋夜ハ	蟬聲
秋冬ハ	湖山	秋月ハ	矢科

四季三景香

香四種

「一」「二」「三」各三包宛 「ウ」一包

何れも試みなし

無試十炷香の通りなり

初めに「一」「二」「三」の香を一包宛除き置き、残る六包の内へ「ウ」を一包
入れ七包

として焚き出す。聞き終りて、初めに除き置きたる「一」「二」「三」の内、一
包取りて焚く

なり。聞きを名乗紙に書くなり。跡の一炷、初め七炷の内にて「何番目と何
番目に出し」と初めに聞きを書き出し、名乗紙に印を付け出すなり。た

と(ば、「一」「二」「三」ウと聞きたるに、跡の一炷「二」なりと思えば、この
如くにて

また、はじめ七炷の間「一」「二」「三」ウと聞きたるに、跡
の一炷、「一」「二」「三」の内にて「一」と聞きたる時は「一」「二」「三」ウと
と成りとも

又は「一」「二」「三」ウと聞きたるに、「一」と成りとも書くなり。さ
て、記録は本香七炉

の出を「春夏秋冬雪月花」と定め置き、後に一炷の出を記す時、ウ

の香六の座(六炉目)に出候えば、「月」と書き、七の座へ候出らば、「花」と
書き、この如く出所によりて「春夏秋冬雪月花」と認めるなり。記録「ウ」と

もに三炷当りは

「花」と書き、二炷当れば「月」と書き、一炷は「雪」と書く。一炷も聞かざる
を「眠」と書く。

名目の事

春夏は	蓮生	春秋は	雁金
春冬は	難波津	春雪は	東風
春月は	朧月	春花は	三芳野
夏秋は	蟬声	夏冬は	氷室
夏雪は	高根	夏月は	平砂霜
夏花は	瀧浪	秋冬は	蟋蟀(きりぎりす)
秋雪は	故山	秋月は	更科

四季三景香之記

秋花ハ 野部錦 冬雪ハ 白砂
 冬月ハ 池の鏡 冬花ハ 紅鱗
 雪月ハ 香久山 雪花ハ 木々の盛
 月花ハ 桂の枝

※ 他書には「紅鱗」「水仙」とも

記録左の如し。初心の人には、えがたし。記録を能々考えて聞ようを知るべし。

四季三景香之記

秋花は 野部錦 冬雪は 白砂
 冬月は 池の鏡 冬花は 紅鱗(くりん)※
 雪月は 香久山 雪花は 木々の盛
 月花は 桂の枝

※ 他書には「紅鱗」「水仙」とも

記録左の如し。初心の人には、えがたし。記録を能々考えて聞ようを知るべし。

耶戰香 香四種 花 鶴 月 雪 各四包宛 内一包宛試みに出す

右試終りて、本香十二包の内二包除き置き、残り十包を焚き出す。聞き様、始め

一炷の札は折居に入れ置くなり。十炷焚き終りて開く。二炷目よりは「二炷開き」なり。記録の認め様、初めの一炷は「仮寝」と書く。あたり二点、外れ星二。二炷目より九炷目までは、二炷開きにて出香の如く「雪・月」或いは「鶉・花」などとならべて書く。十炷目を「寢覚」と書く。札紋、表の方、玉階、金闕、謡台、珠簾、画棟、錦帳、翠輦、銀燭、旌旗、鳴鑾、拾人前なり。札うらは

「花」三枚、「鶉」三枚、「月」三枚、「雪」三枚、一人前なり。

この香「十炷香」の札にて聞く時は、「花」を「一」の札にて打ち、「鶉」を「二」の札

耶戰香 香四種

「花」「鶉」「月」「雪」各四包宛 内一包宛試みに出す

右試終りて、本香十二包の内二包除き置き、残り十包を焚き出す。聞き様、始め

一炷の札は折居に入れ置くなり。十炷焚き終りて開く。二炷目よりは「二炷開き」なり。記録の認め様、初めの一炷は「仮寝」と書く。あたり二点、外れ星二。二炷目より九炷目までは、二炷開きにて出香の如く「雪・月」或いは「鶉・花」などとならべて書く。十炷目を「寢覚」と書く。札紋、表の方、玉階、金闕、謡台、珠簾、画棟、錦帳、翠輦、銀燭、旌旗、鳴鑾、拾人前なり。札うらは

「花」三枚、「鶉」三枚、「月」三枚、「雪」三枚、一人前なり。

この香「十炷香」の札にて聞く時は、「花」を「一」の札にて打ち、「鶉」を「二」の札

三日月の雪めゆり打屋
札の表 記録は、やはり「玉階」「金闕」など書くべし。
記録左の如し。

北風	花月	耶
北風	花月	耶
北風	花月	耶
北風	花月	耶
北風	花月	耶
北風	花月	耶
北風	花月	耶
北風	花月	耶
北風	花月	耶
北風	花月	耶
北風	花月	耶

七夕香

香五種

牽牛・かささぎ 月 織女・おぎ 草 牽牛・かささぎ 何
織女・かささぎ 鳥

右試み終りて、本香十四包、七組として「二炷開き」なり。初後構いなし。
「牽牛」の香は、「織女」ばかり試みし、「織女」の香は「牽牛方」ばかり試み
するなり。

組合の名

織女・草

牽牛・月

織女・鳥

牽牛・衣

牽牛・別

織女・祝

「競馬香盤」の通りに溝一つなり。「牽牛人形」、「織女人形」一つ。印
一本中に立て、左右より人形すすむ。印の「竹」へ早く行き附きたる
方、勝ちなり。盤の勝負は終るとも、香は残らず聞くべし。「牽牛方」

「三」を「月」、「ウ」を「雪」この如くにて打つべし。
札の表、記録には、やはり「玉階」「金闕」など書くべし。
記録左の如し。

「耶戦香之記」

七夕香

香五種

「牽牛」五包 「織女」五包 「鶉」三包 萩 三包
各一包宛試みに出す
「雲」二包 試みなし

右試み終りて、本香十四包、七組として「二炷開き」なり。初後構いなし。
「牽牛」の香は、「織女」ばかり試みし、「織女」の香は「牽牛方」ばかり試み
するなり。

牽牛・おぎ 月 織女・おぎ 草 牽牛・かささぎ 何

織女・かささぎ 鳥

織女・雲 衣 牽牛・雲 別 織女・牽牛 祝

盤は、「競馬香盤」の通りに溝一つなり。「牽牛人形」、「織女人形」一つ。印
一本中に立て、左右より人形すすむ。印の「竹」へ早く行き附きたる
方、勝ちなり。盤の勝負は終るとも、香は残らず聞くべし。「牽牛方」

織女と別れ、双方の枝を合せて多き方一間にも二間に
ても進むべし。「牽牛」の香、始めて出し時は、「牽牛方」も一人聞きは
二点、「織女方」にて「織女」の香、初めて出し時、一人聞きは二の盤のすすむ
事も点数とおなじ。「祝」の香は、左右ともに一人聞きは四点、二人より
は二点、聞き違えたるは、点数ほど星を附ける。記録は中りばかり記す。
この香、点法、聞き様ともにさまざまあれど、余り入り組みてむずかしれ
ば、今ここに改む。札紋
妻待夜、棹の雫、宿の池水、星合の空、
天の川波、衣の裾、秋の初風、露の玉章
紅葉の橋、別の袖
今更し移む札紋
右記録牽牛香織女香大古玉則よりそ外盤物と並細に
認めこれあるによつて、記さずなり。

織女方と別れ、双方聞きの数けし合せて、多き方一間にても二間に
ても進むべし。「牽牛」の香、始めて出し時は、「牽牛方」も一人聞きは
二点、「織女方」にて「織女」の香、初めて出し時、一人聞きは二の盤のすすむ
事も点数とおなじ。「祝」の香は、左右ともに一人聞きは四点、二人より
は二点、聞き違えたるは、点数ほど星を附ける。記録は中りばかり記す。
この香、点法、聞き様ともにさまざまあれど、余り入り組みてむずかしれ
ば、今ここに改む。札紋
妻待夜、棹の雫、宿の池水、星合の空、
天の川波、衣の裾、秋の初風、露の玉章紅葉の橋、別れの袖
右記録、「牽牛方」「織女方」左右に立ち別れ聞く。そのほか盤物あれども細に
認めこれあるによつて、記さずなり。

桜香

香四種

- 「一」四包 「二」四包 「三」四包 各一包宛試に出す
- 「ウ」三包 試なし

右の香を一を「初春」、二を「如月」、三を「弥生」、ウを「花」と立てて聞く
なり。誠み終つて、本香十二包打ち交ぜ、二包除けて十包となして
焚き出すなり。「二炷開き」にして記録す。聞の名目

- 一一 初春 二二 如月 三三 弥生 一二 しら雲
 - 二一 白雪 三一 木影 一三 下臥 二三 横雲
 - 三二 しをり ウ一 明ぼの 一ウ タばえ 二ウ 尋花
 - ウ二 見花 三ウ 都花 ウ三 タ花 ウウ 色香
- 本香の出様にて「ウ」の一炷出たる時、この歌を書く。
桜花咲にけらしなあし引の

楊香 香四種 一色二色三色包宛

右の香一と初春二と如月三と弥生ウと花とまきく出
たり減つて本香十二包を文二色津着て十包とまきく
焚き出すなり。二炷開きにして記録す。聞の名目

- 一一 初春 二二 如月 三三 弥生 一二 しら雲
 - 二一 白雪 三一 木影 一三 下臥 二三 横雲
 - 三二 しをり ウ一 明ぼの 一ウ タばえ 二ウ 尋花
 - ウ二 見花 三ウ 都花 ウ三 タ花 ウウ 色香
- 本香の出様にて「ウ」の一炷出たる時、この歌を書く。
桜花咲にけらしなあし引の

山のかひより見ゆるしら雲
ウ三炷出たる時は

おしなべて花の盛りになりけり

山の端（こ）にかかる白くも

ウ三炷出たる時は

雪かとのみぞあやまたれける

記録左の如し

記録左の如し

名	三炷出たる時は	三
名	三炷出たる時は	三
名	三炷出たる時は	三
名	三炷出たる時は	三
名	三炷出たる時は	三
名	三炷出たる時は	三

山のかひより見ゆるしら雲

(古今和歌集 紀貫之)

「ウ」三炷出たる時は

おしなべて花の盛りになりけり
山の端（こ）にかかる白くも

(山家集 西行)

「ウ」三炷出たる時は

みよしの野の山べにさける桜ばな
雪かとのみぞあやまたれける

(古今和歌集 紀友則)

記録左の如し

五月雨香

香三種 一ニ二香二色先
三香三色先

右二色打ち交二色宛まわして一方二色を宛て一方へかへ四色とる
一して焚き出す十炷香ありて神妙一とて二炷目を
二とて余は是を燃へ四色かめ燃えて湯か二色の匂を二色とて
焚き出す是の匂とて焚き出す四炷の用竹枝目の香と名乗紙に
書き出すは香の順を一五月雨、二しぐれ、三むらさめ、四
りてゆめとて、後の香初めの一の香とおもわば五月雨と書
す香目の香とおもわば時雨と書くなり。ほか、これにて知るべし。

詠澤たの如し

六月五日 遊の香 時雨と木の葉散る
村雨 私語 夕立に「烈希」と書く

六月五日香記

二	三	一	二
二	一	二	三
三	二	一	二
四	三	二	一
五	四	三	二
六	五	四	三
七	六	五	四
八	七	六	五
九	八	七	六
十	九	八	七
十一	十	九	八
十二	十一	十	九

此香ハ
五月五日に於て村雨焚くもの
第一きとてふまゝ(てんざ)
此御製を以て
東福門院 御作意ありしとぞ

五月雨香

香三種

一ニ二ニ三 各二包宛いづれも試みなし

右二包打ち交ぜ、三包ずつに分けて、一方より一包を取りて、一方へ加え
四包とな
して焚き出す。「無試十炷香」におなじく、初を「一」と聞く。二炷目替ら
ば「二」と聞く。余はこれに准ずなり。さて、四包聞き終りて、残る二包の
内を一包とりて
焚き出す。これを聞きて前に出たる四炷の内、「何炷目の香」と名乗紙に
書き付け出すなり。香の順を一「五月雨」、二「しぐれ」、三「むらさめ」、四
「夕立」と定めて聞くなり。よつて、後の香、初めの一の香とおもわば「五月雨」
と書く。二番目の香とおもわば「時雨」と書くなり。ほか、これにて知るべし。

中りの名目
五月雨に「玉水」と書く 時雨に「紅葉」と書く
村雨に「花香」と書く 夕立に「薫風」と書く

あたらぬ名目
五月雨「滝の音」 時雨に「木の葉散る」
村雨「私語」 夕立に「烈希」と書く
記録左の如し

「五月雨香記」

この香は

五月雨はしぐれ村雨夕だちの
けしきを空にましかへてぞふる

この御製を以て

東福門院 御作意ありしとぞ

新花月香 香三種

花三包 月二包 烏一包 宛試みに出す

右法終り本香六炷打交焚き出す。二炷宛組み合せて聞き、名乗紙
も受し書き出す。ウの中り二点、ほかは一点たるべし。組み合せ間の

名目

花 花 月 月
花 月 月 烏
花 月 烏 月
花 烏 月 雲
烏 雁 花 嵐

記録左の如し

新花月香

香三種

「花」三包 「月」三包 各一包宛試みに出す

「ウ」二包 試みなし

右試み終りて、本香六炷打ち交ぜ焚き出す。二炷宛組み合せて聞き、名乗紙
に聞きを書き付け出す。「ウ」の中り二点、ほかは一点たるべし。組み合せ間の
名目

花・花 花 月・月 月 烏 梢 花・ウ 鶯 月・花 影
月・ウ 雁 烏・花 嵐 烏・月 雲

記録左の如し

〔新花月香之記〕

新花月香記	香三種
花 月 烏	花 月 烏
花 月 烏	花 月 烏
花 月 烏	花 月 烏
花 月 烏	花 月 烏
花 月 烏	花 月 烏
花 月 烏	花 月 烏
花 月 烏	花 月 烏
花 月 烏	花 月 烏
花 月 烏	花 月 烏

鶴 龜 香 香四種

鶴二包 烏二包 内一包宛試みに出す
松二包 竹一包 試みなし

鶴 龜 香

香四種

「鶴」二包 「龜」二包 内一包宛試みに出す
「松」二包 「竹」一包 試みなし

右試二包終りて本香三包打交ぜ焚き出す。手記録にて聞くなり。
 鶴、亀、松」と成りとも
 「松、亀、鶴」となりとも手記録に認め置く。さてまた、「松」一包、「竹」一
 包打ち交ぜ焚き出す。「松」の香、先へ出れば「千歳」と書き、「竹」の香先へ
 出れば「齡(よわい)」と認めるなり。記録左の如し

鶴亀香之記
 松香 亀香 竹香
 名松 名亀 名竹
 名松 名亀 名竹
 名松 名亀 名竹
 千歳月日

籬香 香二種 籬二包 花二包 各試みなし
 右三包打交ぜ焚き出す。手記録にて聞くなり。記録左の如し。

籬香記
 籬香 花
 名松 名亀 名竹
 名松 名亀 名竹
 名松 名亀 名竹

右試み二包終りて、本香三包打ち交ぜ焚き出す。手記録にて聞くなり。

「鶴亀香之記」

「鶴、亀、松」と成りとも
 「松、亀、鶴」となりとも手記録に認め置く。さてまた、「松」一包、「竹」一
 包打ち交ぜ焚き出す。「松」の香、先へ出れば「千歳」と書き、「竹」の香先へ
 出れば「齡(よわい)」と認めるなり。記録左の如し

籬香

香二種

「籬」二包 「花」二包 各試みなし

右三包打ち交ぜ焚き出す。手記録にて聞くなり。記録左の如し。

「籬香記」

菖蒲香

香三種

「五月雨」無試 三包

「沢辺真孤」無試 二包

「菖蒲」無試 一包

右本香六包打ち交ぜ焚き出す。「菖蒲」の香を聞き出すを第一とするなり。

記録、「五月雨」、「沢辺真孤」の中に一点、「菖蒲」二点、

五月雨に沢辺の真孤水こえて

いづれあやめと引きぞわづらふ

頼政

(太平記 源三位頼政)

菖蒲香

香三種

五月雨 無試 三包

沢辺真孤 無試 二包

菖蒲 無試 一包

右本香六包打ち交ぜ焚き出す。菖蒲の香を聞き出すを第一とするなり。

記録、「五月雨」、「沢辺真孤」の中に一点、「菖蒲」二点、

五月雨に沢辺の真孤水こえて

いづれあやめと引きぞわづらふ

頼政

菖蒲香	香三種
五月雨	無試 三包
沢辺真孤	無試 二包
菖蒲	無試 一包

法皇の御製作なり。

「菖蒲香之記」

法皇の御製作なり。

漁獵香

香二種

魚三包 波五包
各試なし

本香八包打交ぜ焚き出す。手記録へ「波に魚」と成りとも「魚に波」と成りとも聞きの通り書き付け出す。「魚」の香ばかりに点をなす。「波」の香は聞き捨てなり。魚三炷

聞けば「網」と認める。二炷聞きは「さで(又手)」と認め、一炷聞きは「釣」と認める。「波」も「魚」も不中は「大風」と認める。



都春香

香三種

柳三包 柳三包 内一包試み出す
ウ二包試みなし

試み二炷終りて、本香六炷、二炷宛ならべて、札にても、または手記録にても、

試み二炷終りて、本香六炷、二炷宛ならべて、札にても、または手記録にても、

柳三包 柳三包 内一包試み出す
ウ二包試みなし

御階 欄干 御垣 樓閣 御溝 渡殿
春風 春霞 春雨 臘月

但し、御当り左右一点、両中両点なり。

漁獵香

香二種

「魚」三包 「波」五包

各試なし

本香八包打交ぜ焚き出す。手記録へ「波に魚」と成りとも「魚に波」と成りとも聞きの通り書き付け出す。「魚」の香ばかりに点をなす。「波」の香は聞き捨てなり。魚三炷

聞けば「網」と認める。二炷聞きは「さで(又手)」と認め、一炷聞きは「釣」と認める。「波」も「魚」も不中は「大風」と認める。

「漁獵香之記」

都春香

香三種

「桜」三包 「柳」三包 内一包試み出す

「ウ」二包 試みなし

試み二炷終りて、本香六炷、二炷宛ならべて、札にても、または手記録にても、

聞くなり。聞の名目、左の通りなり。

桜・桜 桜 柳・柳 柳 ウ・ウ 客 桜・柳 嵐山 ウ・桜 夕日

柳・桜 都の綿

桜・ウ 晴間 柳・ウ 簾外 ウ・柳 朝露 札紋

御階、欄干、御垣、樓閣、御溝、渡殿

春風、春霞、春雨、臘月

但し、御当り左右一点、両中両点なり。

都春香之記
 札 柳 柳 柳
 札 柳 柳 柳
 札 柳 柳 柳
 札 柳 柳 柳
 千支月日

宇治山拾遺香 香四種 花鳥風月

古き宇治山香跋四種花鳥風月と号してさへ尤も紀源と認む

花鳥風月
 鳥 百轉 花鳥 心掛り 花 木の間 花 花の光 風 夜の静
 風 雲間 花鳥 羽音 柳 藤のう 月 関の暁 花 桂の光
 月 雲隠 月 夜鴉
 宇治山拾遺香
 風月花鳥
 名 歌 園 風 皆 喜 撰
 名 抄 五 刺 間 田 次
 名 公 冊 関 曉 田 次
 名 歌 園 列 皆 手 入
 月 手 入

〔都春香之記〕

宇治山拾遺香

香四種

〔花〕〔鳥〕〔風〕〔月〕

右は、「宇治山香」残り四柱「花」「鳥」「風」「月」と号して聞くなり。もとも、手記録に認め出す。聞の名目

花・鳥 百轉 花・風 心掛り 花・月 木の間 風・花 松の雪
 風・鳥 夜の轉 風・月 雲間 鳥・花 羽音 鳥・風 寝ぐら
 鳥・月 関の暁 月・花 桂の光
 月・風 雲隠 月・鳥 夜の鴉

〔宇治山拾遺香記〕

宇治山香

前後皆 喜撰
 前後無 田夫
 前中後無 旧跡
 前無後皆 歌人

祝香

香四種

一蓬萊 二千秋 二萬葉
各四包宛 内一包宛試みに出す
「祝」一包 試なし

十炷香より廻り御焼て、本香十包焚き出す二炷開きを祀願す二炷ともあたらば二点、一炷当りは一点、ウとほかの香と当れば二点なり。聞の名目、左の如し。

- 一 蓬萊 二千秋 三 万葉
- 二 千秋 三 万葉 一 山路の菊 三 光厳門

- 一 常世の徳 二 千秋の橋 三 万葉の龜
- 二 千秋の橋 三 万葉の龜 二 常世の徳 一 山路の菊 三 光厳門

- 一 常世の徳 二 千秋の橋 三 万葉の龜
- 二 千秋の橋 三 万葉の龜 二 常世の徳 一 山路の菊 三 光厳門

祀願の如し

祝香記	香四種
一 蓬萊	二千秋
二 千秋	三 万葉
三 万葉	一 山路の菊
一 山路の菊	三 光厳門

千支月日

祝香

香四種

「一」蓬萊 「二」千秋 「三」万葉
各四包宛 内一包宛試みに出す
「祝」一包 試なし

「十炷香」の通りなり。試み終りて、本香十包焚き出す。「二炷開き」にて記録す。二炷ともあたらば二点、一炷当りは一点、ウとほかの香と当れば二点なり。聞の名目、左の如し。

- 一・一 蓬萊 二・二 千秋 三・三 万葉 一・二 山路の菊
- 一・三 老せぬ門(かど)
- 一・ウ 常世の橋 二・一 三千年の桃 二・三 万代の龜
- 二・ウ 千世の若竹 ウ・一 千歳の鶴
- ウ・二 さざれ石 三・二 千年の松 三・一 長生の家
- 三・ウ 真砂の有数(ありかず) ウ・三 山の寿

記録、左の如し

「祝香記」

右當流雜秘書依違執心授傳畢
猥他見他言不可許也

伊与田宗茂
勝由判

細谷助左衛門殿

明治三十三年十月 日略校

まつを



右、当流秘書と雖も御執心に依り、授伝畢(おわんぬ)。
猥に他見、他言許すべからざるものなり。

伊与田宗茂

勝由判

細谷助左衛門殿

明治三十三年十月 日略校

まつを

令和五年十一月

『香筵雅遊』 國井和裕